因果関係を表す文型の習得について

―中級レベル学習者の「原因・理由」の学習を通して―

三木　杏子

要　旨

本研究では2014年春学期に筑波大学留学生センター開講の文法クラスを受講している学習者を対象に、原因・理由の文型の習得について学習前と学習後の２度にわたり調査を行った。対象とした学習者は中級で改めて原因・理由の文型を学習する。本研究ではその学習効果と課題を検証した。調査の結果、前件と後件の因果関係を適切につかむこと、及び後件が自身の意志でコントロールできるか否かによる文の産出は中級での文法学習を通して習得できることがわかった。またテ形接続については、感情を表す表現と共起する用法は授業で身に着く一方、後件のコントロール性については授業後も誤用が現れやすいことがわかった。さらに接続に関する誤用は中級学習後も抜けきらないこと、また倒置文ではテンスや助詞などその他の誤用が現れやすく、一文として完全な正答となるには難しいことがわかった。さらに、原因・理由の「カラ」が、継起の意味の代用として使用されている可能性が示唆された。

【キーワード】原因・理由　因果関係　コントロール性　化石化　代替用法

Acquisition of Sentence Patterns Expressing a "Causal relationship" : a look at intermediate level learners' learning of "cause and reason"

MIKI Kyoko

【Abstract】This research examines students that attended a grammar class of the University of Tsukuba International Student Center offered in the spring semester 2014. The purpose is to know the effect of learning grammar in an intermediate level class, and to consider some of the difficult points for Japanese learners when learning sentence patterns expressing cause and reason. The results of the investigation, learners can grasp the appropriate causal relationship of the consequent and antecedent, and it is difficult to make correct sentences which surround the control. In addition, misuse of other elements is likely to occur. It was found that it was difficult to provide a completely correct answer in the case of inverted sentences. Also, the possibility is suggested that "kara," which expresses cause and reason, is used as a substitute for the meaning of the succession.

【Keywords】cause/reason, causal relationship, control, fossilization, alternative usage

1．はじめに

筑波大学留学生センター開講の補講科目であるJ510中級前期文法の授業では、『レベルアップ日本語文法中級』（許他 2013）を使用しているが、このテキストの5課「原因・理由」の課では、原因・理由を表す「カラ」「ノデ」「テ」と、前件と後件の関係性を対比して指導できる「ノニ」を扱う。これらは初級でも学習する文法項目であるが、初級を学習し終えた学習者であってもこれらの項目を接続や文脈に即した正しい文として産出できないことも多い。その多くは原因である前件と結果である後件との関係性について、文型ごとの違いを把握できていないことから生じているようである。

そこで本研究では、初級を学習し終え、2014年の春学期にJ510中級前期文法のクラスで学習する学習者を対象とし、本研究で焦点を当てる文型を学習する5課「原因・理由」の授業前及び全学期の授業終了後の2回調査を行うことで、授業を通して「原因・理由」の習得がどのように進んだかを分析、考察する。また、本研究により、中級学習者が初級文法の理解を深め、上級へと進んでいくための中級文法の効果と課題について明らかにすることを目的とする。具体的な本研究の課題は以下の通りである。

課題1：中級前期文法での原因・理由の文型学習の効果を検証する。

課題2：中級前期段階での学習者が原因・理由の文型を学習する際の課題を明らかにする。

2．先行研究と本研究の位置づけ

これまで、「原因・理由」の文型について、「カラ」と「ノデ」についての研究では長くその違いについて論じられてきた。さらに、「カラ」と「ノデ」の語用論的な使い分けの習得についても多く研究がなされているが、畠山（2012）では、母語話者は依頼や誘い、断りなどの場面で相手との関係性を配慮しながら「カラ」と「ノデ」を使い分ける傾向にあるのに対し、日本語学習者は「カラ」が「ノデ」に比べて先に習得される傾向があり、改まり度の高い場面でも「カラ」を選択してしまう可能性があることが示されている。

また、テ形接続についてもこれまで多くの研究がなされてきた。そのうち仁田（1995）ではシテ形の接続について、「付帯状況」「時間的継起」「起因的継起」「並列」と分類し、丁寧な分析が行われている。これによると、特に時間的継起と起因的継起は独立した個別のものではなく、連続性のあるものだと分析されている。

しかしこれまでの研究では、「カラ」と「ノデ」など2つの文型の違いや習得については比較・研究されているものの、「原因・理由」を表す文型を包括した習得状況について複合的に調査している研究は管見の限り見当たらない。

授業で扱う『レベルアップ日本語文法中級』は、課ごとに文型をまとめたテキストであり、初級で学習した文型を意味ごとにまとめている。今回ターゲットとする第5課「原因・理由」の課では、「カラ」「ノデ」だけでなく「テ」や、前件・後件の意味の関係として対

比できる「ノニ」も同時に学習する課として設計されている。つまり学習者はこれまで学習してきた類似する意味の文型を、その違いに注意しながら再学習することになる。

このように文型同士の相違点を意識しながら学習することで、学習者はどのようにこれらの文型を習得していくか、また、どのような困難点があるのかを明らかにしたいと考える。

3．調査および結果の概要

3．1　調査方法

調査は中級前期レベルにあたるJ510-1A，2A，3A[1]の文法クラスを受講している学習者の中から協力者を募り、授業時間外に時間を設けて行った。なお、調査は授業前（以下では調査(1)とする）と授業後（以下、調査(2)とする）の２回行い、調査(1)は17名、調査(2)は15名の協力を得た[2]。

調査内容は文完成問題とフォローアップインタビューを行った。また、文完成問題については、part1・文完成問題、part2・ショートエッセイの２つの活動を行った。これにより、２つの形式で文を産出することで、「原因・理由」の文型の使い分けや前件・後件の関連性について、詳細に分析することを目指した。さらに、調査(1)と調査(2)の結果を比較することで、中級文法の学習の効果と課題を分析した。

3．2　結果の概要

本節では２回行った調査の結果について、part1の文完成問題とpart2のショートエッセイとに分け、結果の概要をまとめる。

3．2．1　part1文完成問題の概要

ここではまず、それぞれの調査で得られたデータについて、正用と誤用の分類を行った。誤用については、ターゲット文型以外の誤用も多く見られたため、ターゲット文型の誤用とそれ以外の誤用とを区別してカウントした。なお、１文中にターゲット文型とそれ以外の誤用が混在する場合には、ターゲット文型の誤用としてのみカウントした。

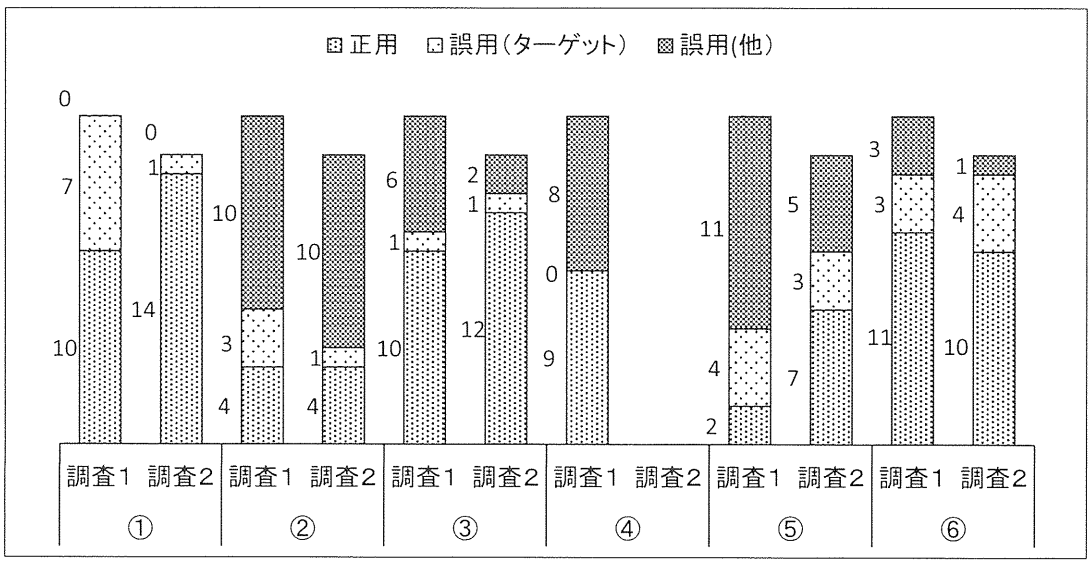
なお、part1では以下のように指示文を提示した。

＿＿＿＿＿＿＿＿に正(ただ)しい表現(ひょうげん)を書(か)いて、文を完成(かんせい)させてください。

また、以下はpart1の２回の調査について正誤をまとめた資料である[3]。

【表１】 Part1 調査(1)(2)正誤表

	問題文	調査(1)			調査(2)		
		正用	誤用(ターゲット)	誤用(他)	正用	誤用(ターゲット)	誤用(他)
①	学生：レポートの提出が遅れて、____。 先生：次からは気を付けてくださいね。	10	7	0	14	1	0
②	きのう_____のは、_____からです。	4	3	10	4	1	10
③	最近は_____、全然休めません。	10	1	6	12	1	2
④	今日は_____から、もう帰りましょう。	9	0	8			
⑤	毎日_____のに、_____。	2	4	11	7	3	5
⑥	いい天気_____。	11	3	3	10	4	1



【図１】 part1文完成問題　正誤の比較

表１及び図１のように、設問ごとに正答数が増えた問題もあれば（①、⑤）、正用数が増えなかった問題もあった（②、⑥）。なお、詳細な分析については４章で設問ごとに行うこととする。

3.2.2　part2ショートエッセイの概要

次にpart2の概要について説明する。Part2はショートエッセイである。ショートエッセイでは原因・理由の文が出ると予想される３つのテーマを提示し、学習者に書きやすいテーマを選び書いてもらった。以下が指示文である。

原因・理由を表す「から」「だから」「ので」「て」を使って、ショートエッセイを書いてください。テーマは下の中から１つ選んでください。
①日本に来て驚(おどろ)いたことについて　　②先生に注意されたことについて
③今の自分の研究テーマを選(えら)んだ理由

学習者が実際に選んだテーマの数は、調査(1)では、①6、②2、③9で、調査(2)では①4、②2、③9だった。

次に分析方法についてであるが、ここではpart 1とはちがい、ターゲット文型にのみ焦点をあて正用と誤用の判断をした。これは１文がかなり長い場合もあり、ターゲット以外の部分も入れると誤用が多くなってしまうからである。表２及び図２は調査(1)と(2)の文型ごとの正誤結果である。

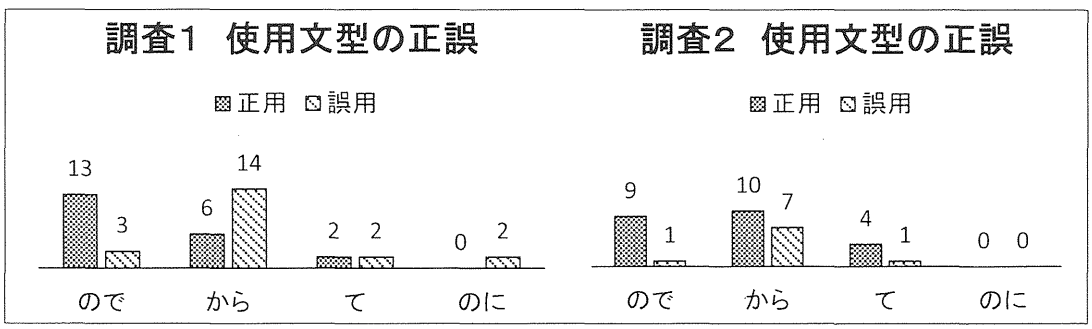
【表２】 Part2　ショートエッセイ中の原因・理由文型の正誤

(調査(1)の結果)

正用		誤用		合計
ので	13	ので	3	16
から	6	から	14	20
て	2	て	2	4
のに	0	のに	2	2
	21		21	42

(調査(2)の結果)

正用		誤用		合計
ので	9	ので	1	10
から	10	から	7	17
て	4	て	1	5
のに	0	のに	0	0
	23		9	32



【図２】 part2ショートエッセイ中の使用文型正誤

表２および図２を見ると、調査(1)では「カラ」の誤用が多く見られるが、調査(2)では正用数が誤用数を上回っている。また、「テ」についても、使用文数が増えたほか、正用としての使用が増えている。全体的に見ても、調査(1)では正用と誤用が半々だったのに対し、調査(2)では正用数：誤用数＝23：9と正用数が増えたことがわかる。学習者が自

由に文を産出する場合、正用としての使用が授業後に増したと言えるだろう。

以上、本章ではpart 1とpart 2の概要を示した。これを見ると、中級文法での学習を通して、特にpart 2のような自由な産出では正用が増える一方、part 1の一部の問題に見るように習得の難しい点もあることが推察される。この点について、次章では各問題について詳細に分析していく。

4．原因・理由表現の習得状況

4．1　part1　文完成問題の分析結果

本節では、part 1として実施した文完成問題から、各問題の習得状況と誤用の特徴について分析していく。なお、以下の用例は、調査(1)で得られたものには(1)を、調査(2)で得られたものには(2)を文末に表記する。

4．1．1　謝罪を表す表現が後続する場合

まず感情を表す要素が原因・理由の「テ」の後件として表れる例を見る。テ形には、「～てありがとう」「～てすみません」など感情を表す表現が後続することができるが、今回はその中でも謝罪の機能として使えることを取り上げて分析を行う。なお以下では各設問の問題文を［　　］の中に示す。

学生：レポートの提出が遅れて、＿＿＿。 先生：次からは気を付けてくださいね。

調査(1)において、誤用のすべてが文型に関わりのある誤用だった。その誤用の多くは、下線部である後件について、「レポートが遅れた理由」を説明しようとするものであった。

例）1　学生：レポートの提出が遅れて　*(風邪で前週を休みだったから)*。(1)

　　2　学生：レポートの提出が遅れて　*(提出の時間がちがうので)*。(2)

これらの誤用から、学習前の段階では原因・理由を表すテ形についての認識が不足していると言えるだろう。対して調査(2)で誤用としたものは、表記の間違い（「すみもせん」）のみであったため、実質上はほぼすべての学生が正答できるようになったと言える。感情を表す表現と接続するテ形については、授業内でのテスト等の結果を見ても比較的習得しやすかったようであり、学習者がこの文の文脈を読めるようになったと言えるだろう。

4.1.2　倒置文の場合

次に、原因・理由の文型を使った倒置文について見ていく。

きのう＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿のは、＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿からです。

この問題は、「カラ」と「ノデ」の使い分けに着目した、原因・理由節が後件に来る倒置文である。

調査(1)では、ターゲット文型に関する誤用は3例であり、そのうち2例は無回答であった。その他の誤用は、テンスによるもの9例（例3）と助詞間違い1例（例4）だった。

例）3　きのう*（出席しない）*のは、*（病気になりました）*からです。(1)

　　4　きのう*（ゼミをでなかった）*のは、*（病院に行った）*からです。(1)

意味自体が身についていない学生も数名いるものの回答した学習者については意味の面では正しい形で使用することができていた。ただし、テンスや助詞などの間違いは多く、授業前には正確な文の産出は難しかったと言える。

しかし、授業後の調査(2)でも同様のテンスや助詞の誤用が見られた。

例）5　きのう*（ゼミが欠席）*のは、*（病院に行った）*からです。(2)

　　6　きのう*（授業を休む）*のは、*（病気だ）*からです。(2)

例5，6のように調査(2)でも調査(1)と同様のターゲット文型以外の誤用が見られ、正用数は増えなかった。しかし調査(1)と調査(2)のデータを比較すると、無回答がなくなったことやターゲット文型の間違いは減っていることから、文型自体については理解が進んだといえるだろう。ただし調査(1)で正答できた学習者でも調査(2)の段階で上記のような助詞などの間違いをしてしまう学習者もおり、誤用が改善されにくいと言える。

先にも述べたとおり、「～のは・・・からです」は理由を強調する文型であり、倒置文である。調査(2)時には、文型の意味についての理解は進んだものの、テンスや助詞の誤用が見られたのは、この強調の文型が完全には定着していなかったことを意味していると考えられる。

4.1.3　無意志表現の場合

次に、後件に無意志表現を使用している文について見てみたい。

最近は＿＿＿＿、全然休めません。

この問題は、後件の「休めません」が不可能を意味する無意志表現であり、これは原因・理由の「テ」と相性がいい表現である。しかし「カラ」「ノデ」「テ」のいずれを使用しても正用と言えるだろう。そこでこの問題では、正用／誤用のほかに、使用している文型についても細かく見ていくこととする。

調査(1)では、正用10例、ターゲット文型の誤用１例、その他の誤用が６例であった。また、使用文型は「ノデ」11名、「カラ」５名、「テ」１名で、文の意味についての誤用は見られなかった。ターゲット以外の誤用が見られるものの、意味自体はきちんと捕らえられているといえる。ただし、「テ」は１名しか使用しておらず、ほとんどの学習者が「ノデ」を使用していた。

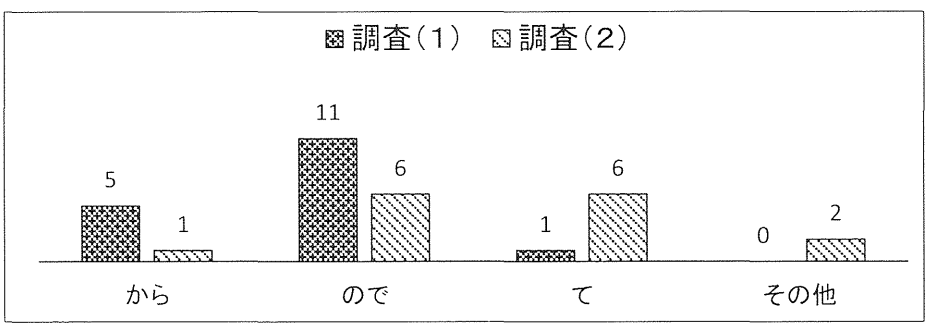
例）7　最近は（*宿題がたくさんあるから*）、全然休めません。(1)

　　8　最近は（*論文を書くので*）、全然休めません。(1)

　　9　最近は（*研究が忙しくて*）、全然休めません。(1)

これに対して調査(2)では、正用12例、ターゲット文型の誤用１例、その他の誤用が２例だった。また、使用文型は「ノデ」６例、「カラ」１例、「テ」６例、他２例であった。なお、原因・理由の表現を使わなかったその他の例は並列の「ダノ」や「ヤラ」を使った文だった。これらは授業の別の課で扱った文型だが、文の内容から正用とは言えないと判断した。

この問題について、文型の使用頻度について調査(1)と調査(2)で使用された文型の違いをグラフにすると図３のようになる。



【図３】 part1③での使用文型

前述の通り「全然休めません」は無意志表現であり、原因理由のテ形と相性がいいということができる。調査(1)ではテ形を使った例は１つしか確認できなかったが、調査(2)ではテ形の使用が増えている。フォローアップインタビューでも後件に注目してテ形を選択した学習者がいたことが確認されており、後件に自身の意志ではコントロールできない表

現が使用されている点に着目してテ形を使用できるようになっていると考えることができる。

4.1.4　判断を表す場合

ここでは、「もう帰りましょう」と言うための判断をした理由を述べる問題について見ていく。

今日は＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿から、もう帰りましょう。

調査(1)では、ターゲット文型は理解できている一方で、以下の例10、11のようなターゲット文型以外の誤用が見られた。

例）10　今日は（*仕事は終る*）から、もう帰りましょう。(1)

　　11　今日は（*そんなに遅くなった*）から、もう帰りましょう。(1)

しかし、これらのテンスや指示詞の誤用はターゲット文型と直接のかかわりはないと考えられ、またターゲット文型自体の誤用がなかったことから、調査(2)ではこの設問については調査対象としなかった。

この問題のように、「カラ」で判断の理由を述べる文型は中級に入った段階である程度きちんと身についていると考えられる。

4.1.5　予想外のことを表す場合

次に、「ノニ」を使用した文について考えてみたい。この文では、前件で提示されたことに対し、期待や予想外のことが後件に来る必要がある。

毎日＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿のに、＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿。

調査(1)では完全な正用は2例と少なかった。また、ターゲット文型の誤用に分類した4名のうち1名は「ノニ」の使い方がわからず無回答だった。さらに、例12のように、「ノニ」の用法自体を間違えている例も見られた。

例）12　毎日（*雨が降ている*）のに、（*バースに乗ています*）。(1)

　　13　毎日（*勉強した*）のに、（*いい点数は取らなかった*）。(1)

調査(1)を行った段階では、「ノニ」の使用は他の文型に比べてやや身についていないようであった。「ノニ」が「前件とは反対」という意識はあるものの、例13のようにコントロー

ル性[4]にまつわる誤用が多く見られた。

一方調査(2)で得られたターゲット文型に関わる誤用３例は、「毎日ろんぶんをかくのに卒業できるようにがんばる」など、「ノニ」の使い方がわかっていないものだったものの、そのほかの７名が正用として「ノニ」を使用しており、多くの学習者は「ノニ」の意味について理解し、使用できるようになっていた。

またターゲット文型以外の誤用としては、例14のように「運動するのにほそくなっていない」など、調査(1)の時と同様、テンスと助詞及びコントロール性にまつわるものだった。

例）14　毎日*（運動する）*のに、*（あまりほそくなっていない）*。(2)

　　15　毎日*（かんじをべんきょうする）*のに、*（かんじをおぼえませんでした）*。(2)

例15のように、後件に意志表現を使用してしまい、誤用となる例が非常に多く見受けられた。授業により、「ノニ」の意味及び使用の正用は増えるものの、他の問題に比べてテンスや助詞などその他の誤用が抜けきらないようである。4.1.2節で見た倒置文同様、注意が必要な文型だと言えるだろう。

4.1.6　前件で条件を表す場合

次に前件で条件を表す場合について見てみる。調査したのは以下のように、前件と後件のどちらも考える必要がある自由度の高い問題である。

いい天気＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿、＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿。

調査(1)において、ターゲット文型のまちがいは例16のような接続に関するもの３例だけであった。また、その他の誤用は助詞などであった（例17）。

なお、この文は、日本語能力試験の例文などで聞き覚えがあったという学習者も多かった。

例）16　いい天気*（から、外へ遊びに行きましょう）*。(1)

　　17　いい天気*（だからこえんにさんぽしましょうか）*。(1)

そのため、調査(2)では正用数が増えるであろうと予想していたが、調査(2)でも正答数は増えず、例18、19のような接続に関する誤用もなくならなかった。

例）18　いい天気*（だが、散歩に行きましょう）*。(2)

　　19　いい天気*（ので、一緒に公園に行きましょうか）*。(2)

以上より、前件で条件を表す場合は、意味の上では初級終了段階で理解できているものの、中級に入っても接続に関して注意が必要だと言えるだろう。

4.1.7　後件で結果に注目する場合

次に、調査(2)のみで行った追加問題について分析を行いたい。

今回の調査(1)及び授業での学習者の様子を見ていると、以下のような後件のコントロール性にまつわる問題で誤用が多く見られた。

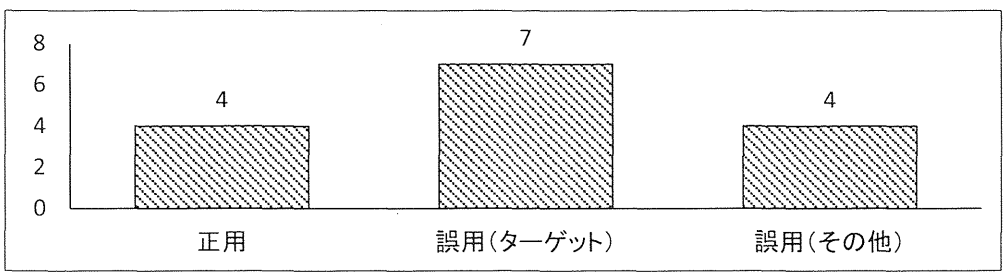
例）20　きのうは暑くて、（　*夜寝なかった*　）。(作例)

この文は、テ形の後が自分の意志ではコントロールできないことについて述べる文であり、本来は「寝られなかった」のように不可能の形にすべきだが、例20のように解答してしまう学習者が多く見受けられた。このようなコントロール性の有無による誤用は4.1.3節の無意志表現と使用する「テ」形や4.1.5節の予想外のことを表す「ノニ」の文でも見られており、中級前期レベルの学習者にとって大きな課題になっていると考えられる。そこで、このような表現が中級文法の授業を通して習得できているか確認するため、調査(2)のpart1では以下を追加して調査した。

昨日は隣の部屋が＿＿＿、＿＿＿＿＿＿＿た。

その結果、正用は4例、それに対しコントロール性に関わる誤用は7例見られた。またその他の誤用に分類したものは助詞の間違いなどであった。

この問題では、後件でコントロールできない無意志表現しか使えないが、やはり意志表現を使った誤用が多く見られる結果となった。



【図4】　調査(2) part1⑦　コントロール性についての正誤グラフ

例）21　昨日は隣の部屋が（*火事が出て、びっくりした*）。(2)

22　昨日は隣の部屋が（*うるさくて、あまり寝てなかった*）。(2)

誤用を見ていくと、例21、22のように意志表現を使うことによる誤用が非常に多いことがわかる。授業後ではあるが、いまだに正用より誤用が多く見られることからも、コントロール性にまつわる意志／無意志表現の使い分けは中級前期レベルの学習者の課題のひとつになっていると考えられる。

以上、part1の文完成問題について各問題の誤用を分析した。その結果、以下の点が課題として浮かび上がってきた。

ｉ）コントロール性：後件が自身の意志でコントロールできるか否かという点についての誤用が多く見られた。特に前件にテ形が使用されている場合、後件は自身の意志ではコントロールできない要素が来る必要があるが、自他動詞の使い分けの課題も合わせて正しい文が産出されにくいと考えられる。

ii）倒置文：倒置文では通常の文に比べて、ターゲットとなっている文型以外のテンスや助詞の誤用が目立った。授業での学習により、前件と後件の関係性自体は理解できるものの、文を産出する段階では注意が足りずこのような結果となったと考えられる。

一方で、4.1.3節で見たようにテ形の使用が増えるなど、授業により習得できた項目も確認できた。文脈に適した文型を使用できる力は、中級以降に進んでいく学習者にとっては大きな収穫であると考える。今回扱っている文法項目の学習が単なる初級の復習ではなく、自然な使用につながる学習となったと考えられる。

4．2　part2の分析

本節では、part2のショートエッセイで得られた誤用の特徴から見えてきた課題点について分析していく。

4．2．1　「原因」「理由」の語との結びつき

調査(1)では、以下のように「原因」「理由」という語彙と「カラ」を同時に使う文が見られた。

例）23　その以上の理由が、私はその研究テーマを選んでいるからです。(1)

24　原因を調べて、もうわかりました。先生がおしゃった提出するとことはメールボクスじゃなくて、先生の教員室の箱ですから。(1)

例23と例24を見ると、どちらも「理由」「原因」という言葉が文の前半に見られる。「カラ」が原因・理由を表すということへの意識はあるものの、その使用で誤用となってしまった例だと言える。しかし、このような形の誤用は調査(2)では見られなかった。授業により、例23、24のような誤用は見られなくなったと言えるだろう。

4.2.2 文末の「カラ」

調査(1)でも調査(2)でも見られたのが、以下に示すような文末での「カラ」の使用である。

例）25 なぜなら、この事業は自分の特長を生かすことができ、熱情があり、やりたい仕事と思いますから。(1)

26 それはどうしてでしょうか。専門の教授にうかがうと日本のバブル経済時代を経ってから利金はずっと少なくなったからです。(1)

27 今電車を乗るとき、ときどき人身事故があったと聞いた。それが酒をいっぱいのんだから。(2)

28 なぜなら、留学生として、日本の子どもと中国の子どもの健康実態を調査して、比較して、子どもが健康に成長するように研究したいですから。(2)

29 日本のレサークルのチステマ（＝リサイクルのシステム）がすごいと思うけど、チリで同じことするのはより（＝むり）と思います。文化がせんせんしがう（＝ぜんぜんちがう）から。(2)

上記の例25、26、28のように、文末使用の「カラ」の多くでは文頭に「どうして」などで疑問を提示し、あとから自分で答えを提示する形が多く見られた。また、例27、28、29のように文末の「です」が脱落してしまう例も多かった。4.1.2節でも取り上げたように、1文中での倒置関係の文が学習者にとっては正しく産出することが難しいものであることがわかる。

また、以下の例30、31のように「なぜなら」が使用されていながら、文末の「カラ」が脱落してしまう例も見られた。

例）30 なぜなら実は、私、日本にきたばかりの時、友達と一緒に銀行に予金に行った。(2)

31 なぜなら、私の卒論「河北省における一般大学のテニス発展現状と発展対策」という題目で、中国の河北省の大学の大学生を対象とした。(2)

理由をとりたてて言う文を作る場合、特に文末での誤用が多く、「カラ」や「です」が脱落してしまうことがうかがえる。

また、この点について、以下に示すように、1文として見ると違和感があるが、理由が1文にとどまらず、複数文にわたり続いている例が見られた。

【調査(2) 学習者のショートエッセイ例　研究テーマの選択理由】

a	私は、今、日本のバブル経済について研究している。
b	なぜなら 実は、私、日本にきたばかりの時、友達と一緒に銀行に予金に行った。
c	その時、日本の低い金利のことに驚いた。
d	ゼミの時、そのことを先生に伺うと、それは日本で1980年代後期からのバブル経済に関係があることが分かった。
e	その後、自分もたくさんの資料を調べて、次第に興味を持ってくる。
f	だから、今、私は日本のバブル経済において銀行の動きというテーマで研究を続いている。

このように、「なぜなら」で説明しようとしている「バブル経済について研究している理由」はbという1文では終わらず、c, d, eと全部で4文に渡って記述されている。この学習者がbで「からである」という表現を文末で使用しなかったのは、理由を表す文がその後も続いていくからだということはフォローアップインタビューでも確認された。これは文の結束性にまつわる誤用だと考えられるが、このような結束性にまつわる誤用も中級前期レベルの学習者の抱える課題のひとつだと考えられる。

4.2.3　因果関係と継起の混用

学習者の作成した文を見ていると、前件と後件の関係性について、「因果関係」というよりは「継起」として捉えるべきだと考えられる部分についても原因・理由を表す「カラ」でつないでいる例が見られた。

例）32　現在、コミュニケーションの組織・会社もグロブライション（＝グローバリゼーション）になる から、「sony社」とか「Time Warhar社」とか、いろいろ会社も海外と合併している。(1)

33　中国の漢字の書き方もたくさん体がある から、私は一番速くてきれいではない書き方を勉強した。(1)

34　いまの研究テーマは太陽光電池と「capacitor」と「lighiwm-ion」電池のハイブリトするシステム から、未来の自動車がそのようなシステムを利用する可能が高くある。(2)

これら3つの文は、前件と後件の関係を「因果関係」として捉えることも可能ではあるが、以下のように連用中止やテ形にして、「継起」として捉えたほうが自然ではないだろ

うか。（なお、以下の32'～34'では適宜そのほかの誤用等も修正してある。）

例）32' グローバル化が進んでおり／進んでいて、いろいろな会社も海外（企業）と合併している。

33' 中国の漢字はいろいろな書き方があり／あって、私は一番速くてきれいではない書き方を勉強した。

34' 今の研究テーマは太陽光電池と「capacitor」と「lighiwm-ion」電池をハイブリットするシステムについてで、このエネルギーは未来の自動車で使用される可能性が高いです。

連用中止について、益岡（2013）では、基本的には単純列挙の表示をするが、時系列に沿った列挙の場合、「継起」や「因果関係」の意味を含むとされている[5]。また、時系列に沿った列挙で「因果関係」が含意されるか否かは意志性の有無に左右されるという。この点から考えると、例32'は後件に話し手の意志が含意されていないため継起的な関係に伴う「因果関係」が含意される一方、例33'は後件に意志性があることから「因果関係」の含意は弱く、「継起的関係」が前面に出ていると言える。

また、益岡（2013）では連用中止接続とテ形接続についても述べられている。これによると、連用中止とテ形接続はどちらも「継起／因果」の領域で競合関係にあり、そのうち「継起」の関係については、事態の先後関係が明瞭な場合はテ形が優先的に用いられるとしている。また、「因果関係」については、テ形接続のほうがより「因果関係」の意味を明瞭に表せるとしている。例32，33についても、連用中止の形だけでなく、テ形で書き換えたとしても意味は通じる文となるだろう。

しかし、今回現れた「継起」と「因果関係」との混用は、単に「連用中止」とテ形接続の混用ではなく、原因・理由の「カラ」で行われている。「カラ」には「継起」は含意されないため、違和感のある文となっている。

ここから、まだ用例数が少ないため断定はできないものの、「継起」でつなぐべき箇所を原因・理由を表す「カラ」で代用しているのではないかと推測することができる。

このように「カラ」が多用されることは学習者だけの問題ではなく、日本語母語話者であっても、とくに話し言葉などでは観察されるものではないだろうか。野田（1991）で受動文の動作主マーカーについて、福岡では「カラ」が多用されていると報告されていることからも伺えるように、「カラ」はその使用が拡大しているとも考えられる。また、日本語教育においては「カラ」は初級の初期段階で導入される項目でもあり、学習者にとっては馴染み深く、使用しやすいものであるとも考えられる。

4. 2. 4　接続に関する誤用

接続についての誤用はいくつか見られたが、とくに「ダカラ」について、以下に示すような特徴が見られた。

例）35　水汚染についてシュマレーション（＝シュミレーション）を構築だから、政府に重要な供息を提供できる。(1)

36　日本人の皆が飲み会を2，3時ぐらい終了だから、それは原因かもしれない。(2)

37　さらに、各店員の勤務時間の平準化だから、それを考えてシスト（＝シフト）の作成が難さになると思う。(2)

例35、36、37はいずれも、漢語動詞の動詞「する」が脱落したものだと言える。調査(1)、(2)から、誤用は1回目より2回目のほうが確実に少なくなっているものの、調査(2)でも接続に関する誤用はあるということがわかった。

以上、ショートエッセイ中の学習者の誤用について分析した。その結果、part1で見た文完成問題と同じ問題点、及び異なる問題点が確認された。

i）倒置文

Part1でも指摘した通り、倒置文は誤用が出やすい形のひとつであった。Part2のショートエッセイでは、「なぜなら」を文頭に置き、すでに述べた内容に対する理由を記述する際、文末の「からです」が脱落してしまう誤用が多く確認された。また、文末が「から。」で終わってしまう文も多く見られた。

ii）因果関係と継起の混用

前件と後件を、連用中止などの形で「継起」の意味でつなぐべきところを、原因・理由を表す「カラ」でつないでいる例が数件確認された。連用中止やテ形接続の場合、時系列に沿った接続がされている場合は「継起」や「因果関係」を示すが、「カラ」ではそのような関係性はなく、違和感のある文となってしまっていた。

また、このほかに接続の誤用として、漢語動詞から「する」が脱落し、「ダカラ」が接続する例が確認された。

5．原因・理由を表す表現の学習における問題点の考察

本章では、これまで見てきた誤用の特徴から、中級前期レベルの学習者が抱える諸問題について考察していく。

5.1　コントロール性について

調査(1)では、これまで4章で挙げてきた用例のほかに、テ接続について以下のようなコントロール性にまつわる誤用が見られた。

例）38　先生はまだ「レポートは締め切り以降出して、受理できません」と書いたメールを送りました。(1)

39　レポートの提出が遅れて、今出してもいいですか。(1)

例38は「受理できない」はコントロールできないものではなく、教師の意志で「受け取らない」ものであるため、「ノデ」「カラ」であればいいが、「テ」では誤用となると考えられる。

また、例39では、前件を「レポートの提出が遅れたので」のように「ノデ」「カラ」など他の原因・理由を表す表現に変更するだけではなく、「レポートの提出が遅れてしまったので」などのように「てしまう」を付加する必要がある。このような、後件のコントロール性にまつわる誤用は調査(2)でも確認された。

しかし、4.1.3節で示したテ形の問題において、調査(2)ではテ形の使用が増え、正用数も増えたこと、また4.2節のショートエッセイでも、調査(2)ではテ形の正用数が増えていることから、このコントロール性については中級での文法学習で習得できるものだと考えられる。一方で4.1.7節の追加問題で見たように、授業後も誤用が少なからず確認されていることから、教師がこの点を意識して指導し、注意させる必要があると考えられる。

5.2　接続の化石化

今回の調査では、調査(1)と(2)どちらでも「ダカラ」という形についての誤用が見られた。この点について、市川（2010）では「ノデ」の接続の誤用として、以下のような接続の問題があげられている。

例）40　その工事現場はごみだらけ$\boxed{\text{ので}}$だれも入りたくない。

市川（2010）が指摘しているように、「ノデ」のこのような誤用はなかなか直らず、化石化してしまうことがある。今回の調査では「ダカラ」について、漢語動詞から「スル」が脱落し、「終了だから」のような形になってしまう誤用が見られた。このような「ダカラ」の接続に関する誤用も、化石化の恐れがあるものとして教師が認識する必要があると考えられる。

5．3　文末倒置文

4.1.2節及び4.2.2節で取り上げたように、「昨日学校を休んだのは病気だったからです」のような、原因・理由節が後件にくる倒置文については調査(1)でも調査(2)でも誤用が多く見られた。調査(1)の段階では前件と後件の関係性がつかめていない学習者もいたのに対して、調査(2)の段階ではその関係性についての誤用は減っていた。しかし、テンスや助詞の間違いが減らず、完全な正用が産出できなかった。原因・理由の文型自体の誤用ではないものの、テンスや助詞の誤用を引き起こす要因のひとつとして、倒置関係による文の複雑さが考えられる。

以上より、倒置文自体は中級前期学習者にとって、ひとつの課題だということができるだろう。

5．4　「カラ」の代替用法の可能性

4.2.3節で見たように、「継起」の連用中止やテ形でつなぐべきところを原因・理由の「カラ」でつないでいる例が数例見られた。この点について、4.2.3節では益岡（2013）を参考に、連用中止接続とテ形接続では、時系列に沿った形で文が形成されている場合は「継起」と「因果関係」とが切り離せるものではなく関連していることを確認し、そのうえで連用中止やテ形ではなく「カラ」を使用したために不自然な文となっていたことを確認した。また、今回授業で使用したテキストである許他（2013）では、「カラ」は明確な原因・理由を述べるとされている。ここから考察すると、以下のような形で「カラ」が継起としての接続で使用されているのではないだろうか。

連用中止とテ形接続とは、時系列に沿った記述の中では互いに関係性がある。また、連用中止の場合、意志表現か無意志表現かの違いが「因果」を含意するか否かを決める。一方で、テ形接続では連用中止に比べより明瞭に「因果関係」が示される。さらに、「カラ」ではテ形よりもよりはっきりと「因果関係」として前件・後件をつなぐ。このように、連用中止とテ形接続では「継起」と「因果関係」が連続的な関係を持っているが、「因果関係」という点でテ形接続と意味的なつながりのある「カラ」が、「カラ」自体は含意しない「継起」の文脈で使用されており、今回のような違和感のある文の産出となったと考えられる。

また、先述の通り、日本語学習者にとっては、「カラ」は初級初期段階に学習する項目でもあり、益岡他（1992）でも指摘されているように多くの用法が存在する形式でもある。以上のことからも、「カラ」を上記以外の意味でも代用して複文を形成している可能性があるのではないかと推測される。

6．終わりに

本研究では、中級前期の文法クラスの学習者を対象に、原因・理由の文型の習得について調査を行った。その結果を、研究課題に照らし合わせると以下のようになった。

課題１：中級前期文法での原因・理由の文型学習の効果を検証する。

課題１について、中級前期文法の学習により、前件・後件の関係性を理解すること、及び後件のコントロール性を理解し正しい文を産出することは少しずつではあるができるようになることが明らかになった。とくにテ形接続による文を正しく産出できるようになった点で、中級文法を学習したことの効果があったと言える。

課題２：中級前期段階での学習者が原因・理由の文型を学習する際に抱えている課題を明らかにする。

課題２については、大きく３点の課題が浮かび上がってきた。ひとつはコントロール性にまつわる問題である。課題１でも触れたが、コントロール性を意識した正しい文の産出は、少しずつ習得できているとはいえ誤用の多い課題であった。自他動詞など関わりのある文法項目も合わせて意識させる必要があるだろう。

２つ目の課題は接続の化石化の問題である。今回多く確認されたのは、漢語動詞を名詞として使用する「平準化だから」のような形の誤用であった。誤用は化石化してしまうと上級へ進んでもなかなか直すことができなくなってしまうものである。初級の段階で化石化しないよう指導することも大切であるが、中級となった段階で改めて確認することで、化石化を食い止めることができるかもしれない。教師が積極的に指導すべき点だと言えよう。

また、もうひとつの課題は倒置文である。前件・後件の関係性については理解ができるものの、テンスなど他の誤用が授業後の調査(2)でも確認された。この点は、原因・理由の文型にとどまらず中級前期学習者が抱える問題のひとつと考えられるのではないだろうか。この倒置文については、経験を積むことで文型に慣れ、テンスなどにも注意が向くようになることも考えられる。教師の側が意図的に多くの練習を行うことで効果があるか、今後の検証が必要だと考える。

さらに、今回の研究課題からは外れるが、原因・理由の「カラ」が「継起」の代替として使用されている可能性をうかがうことができた。「カラ」は初級でも初期段階で提示されることが多い文型である。また、母語話者でも、特に話し言葉では「カラ」を多く使用している場所や人もいると指摘されていることから、学習者も多く耳にしている文型だと言えるだろう。今回は用例数が少ないが、今後の研究課題のひとつと言える。

以上の通り、本研究では中級学習者が原因・理由の文型を学習する上での効果と課題を明らかにすることができた。教師として指導をする際の注意点も示すことができたと考える。

一方で、今回の研究は被調査者が最終的には15名と小規模であったことから、すぐに断定することはできない点も多く存在する。今後もこのような研究を大規模に行っていくことで、中級学習者の抱える課題を明らかにし、より効果的な指導ができるようになるよう努力していくことが必要である。

注

1．筑波大学留学生センターでは、J100からJ800までの８つのレベルが用意されており、今回対象としたJ500レベルはJ100からJ300までの初級クラス及びJ400の初中級クラスを学習し終えた学習者を対象とした中級前期に位置づけられるレベルである。

2．調査(1)の調査協力者は漢字圏出身者が13名、非漢字圏の学習者が４名であり、調査(2)ではここから各１名ずつが減った形であった。また、調査は各クラスの授業進度に合わせ、調査(1)は５月２日～５月19日の間に、調査(2)は７月18日～８月１日の日程で授業時間外に実施した。

3．このうち、調査(2)で斜線部となっている問題④については、調査(2)では実施しなかったことを表す。

4．本稿における「コントロール性」とは、主に後件が話し手の意志でコントロールできるか否かという点を指す。意志表現はコントロールできる事柄を、無意志表現や否定形はコントロールできない事柄を指す。

5．なお、益岡（2013）では「連用中止」について「中立形接続」と呼んでいるが、本稿では便宜的に「連用中止」に統一した。

参考文献

市川保子・浅山友貴・荒巻朋子・板井美佐・太田陽子・坂本まり子・杉本ろここ・副島昭夫・田代ひとみ・野田景子・本郷智子（2010）『日本語誤用辞典』スリーエーネットワーク

仁田義雄（1995）「シテ形接続をめぐって」『複文の研究（上）』くろしお出版：87-126

野田尚史（1991）『はじめての人の日本語文法』くろしお出版

畠山衛（2012）「日本語学習者による原因・理由を表す接続助詞「から」「ので」の語用論的使い分け能力の習得を探る横断的研究」『ICU日本語教育研究』国際基督教大学日本語教育研究センター：3-17

許明子・宮崎恵子（2013）『レベルアップ日本語文法中級』くろしお出版

益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法改訂版』くろしお出版

益岡隆志（2013）『日本語構文意味論』くろしお出版